

兩陣船越にて行き合うたり、互いにそれと見るよりも関をぞ上げにける、関の声も沈まれば大高相模守、駒一陣にかけ出し大声上げて名乗りける、そもそも、ここに罷り向かいたる大將いかなる者と思うらん、切山の城代大高相模守康澄なり、この度、我君愛季公の仰せを蒙り御代官としてこれまで罷り向かいて候なり、そもそも、九郎殿無道反逆を企て親有の叔父に弓引く事、天罰いかで遁るべき、格利を思わば、甲を抜き、弓弦を外し降参せよ、と高声に名乗りける。

九郎殿方より大井將監・大久保蔵人之助・後藤采女正、駒を寄せ立ち上がり御辺申すごとく、其方は叔父、此方は忝くも安藤の嫡々なり、格利比べかし給えと持ちたる弓に矢をかけ、差し詰め引き詰め、散々に射たりける。康澄此の由見るよりも、鉄砲に火繩を付け、きびしく打ち放す。

兩陣入り乱れ命を捨て、ここを先途と戦いける。鉄砲の音、矢叫びの声、天地も響きて夥し。されば九郎殿小勢なれば何かはもつてたまるべき、残り少なに討たれける。相模守これを見て敵は引色なり、打ち漏らすな方々、と下知をなし、ここを先途と戦いける。終日の戦いに敵も味方も押しなえて、死人を突く。かゝる所に相模守方より小貫の四郎、次郎と名乗り鎧をひねりて出にける。湊勢の方よりも林野喜三太是を見て、太刀ひっさげ出で戦いける、喜三太、何とかしたりけん、右の脇を突かれ、不意にどうと伏しにけり、四郎、次郎乗つかかり首を討ち取り、本陣へ引き返す。また大高方より村上彦四郎と名乗り、湊勢の内、我と思う人あらば出合い給え、と呼ばわったり、

大川七郎と名乗り出、彦四郎に掛け合い追いつまくつつ戦いける。村上何とかしたりけん、大川の太刀を請け外し細首を討ち落され朝の露とぞ消えにけり。下莉、宮内これを見て、そこを引くな、と打ち出る。大川七郎、心得たりと取って返し、打ち合いけるが無残なる哉、七郎が眉間二つに打ち割られ終にむなしくなりにける。

湊勢この由見るよりも、余すな、と下知すれば、一度におめいて打つてかかる。康澄これを見て、下莉討たすな者ども、と男鹿勢類に切つて出て、追いつ返しつ戦いける。湊勢かけ立てられ、今は叶わじ、と湊をさして逃げ返しける。相模守、勢いかかって下知をなし、余すな漏らすな打ち取り、と追いつ掛け追いつ詰め打つほどに、湊の城にも留りかね、三日三夜と申すには秋田仙北の境なる赤墻として追いかけれ、九郎殿、仙北さして落ち給う。

大高相模守、今はこれまでなりと、関守すえ置き、勝鬨作り、めでたしと男鹿をさして帰陣あり。

秋田城之助愛季公 湊へ御移りの事

さても、大守城之助安部愛季公は、九郎殿を思いのままに打ち従え、今は浮世に思い置く事なかりける。いざや湊へ帰るべしと御帰りなさるこそめでたけれ。

ある時、御家の老中、御前に召され、愛吉に組したる反逆の輩、追討仕るべき由、仰せ出されけ